



宮のおんがく会 vol.7 ~フレッシュなアーティストと名曲アラカルト~

2016.10.30(日) 開場13:30 開演14:00 富士宮市民文化会館大ホール

主催：宮のおんがく会実行委員会・(公財) 富士宮市振興公社 後援：富士宮市教育委員会



ごあいさつ

今日は、「宮のおんがく会vol.7 ～フレッシュなアーティストと名曲アラカルト～」に御来場いただき、誠にありがとうございます。

この「宮のおんがく会」は、地元出身の音楽家及び富士宮市を中心に活動する音楽家のコンサートを開催し、市民の皆様に鑑賞いただくことにより、音楽を通じて地域文化の発展に寄与することを目的としており、今年で7年目を迎えました。

今回のコンサートは、ピアノと歌、そして弦楽器を中心としたプログラムでお届けする「～名曲アラカルト～」です。深まる秋の午後の一と時、ピアノと澄んだ歌声、そして弦楽器の美しい音色を楽しんでいただけたら幸いです。

最後になりましたが、開催に当たり御協力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、今後も市民の皆様に楽しんでいただけるような事業を企画してまいりますので、皆様の御支援御協力をお願い申し上げます。

宮のおんがく会実行委員会委員長
公益財団法人富士宮市振興公社理事長
河原崎 信幸



「宮のおんがく会vol.7」開催に寄せて

「宮のおんがく会vol.7 ～フレッシュなアーティストと名曲アラカルト～」が盛大に開催されますことに心よりお喜び申し上げますとともに、開催に向けて御尽力いただきました関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

この「宮のおんがく会」は、富士宮市の内外で活躍されている市に縁のある音楽家の皆様に御出演いただき、より多くの方々に音楽を身近なものとして、お楽しみいただくという思いを込めて開催しており、毎回、地元音楽家による美しい演奏をお届けしています。

第7回を迎える今年は、「フレッシュなアーティストと名曲アラカルト」と題し演奏されます。ピアノ、歌、弦楽器を奏でる若い音楽家たちのエネルギーあふれる音を感じていただけたと思います。

御来場の皆様におかれましては、深まる秋の午後、格調高く味わい深い演奏にじっと耳を傾け、心満たされるひと時をお過ごしいただければ幸いです。

結びに、「宮のおんがく会」が、今後も開催され、富士山の麓に降り注ぐ朝陽のように光放つ文化として受け継がれ、芸術、文化としての音楽が市民の皆様に愛され、より身近なものとして広がっていくことを心より祈念し、私のあいさつといたします。

富士宮市教育長 池谷 眞徳

Program Note

1. 半音階的幻想曲とフーガBWV903 J.S.Bach (1685～1750)

作曲年不明、更に自筆譜が消失している楽曲だが、恐らくバッハがライプツィヒにいた1730年頃に完成されたと見られている。この曲は前半と後半で大きく性質が異なる。前半は幻想曲で、半音階で構成される非常に自由な性格の曲となっている。後半の予兆を感じさせつつ、始終ドラマチックな様子で前半は終わる。後半はフーガとなり、前半と同じく半音階の書法による、なだらかな主題に基づく3声のフーガで進行する。終盤では低音部に8度で重ねられた力強い主題が現れ、大きなエネルギーを伴って堂々と結ばれる。(解説 植松美帆)

2. ピアノ・ソナタ第26番『告別』作品81a L.v.Beethoven (1770～1827)

このソナタはベートーヴェン唯一の作曲の弟子であり、パトロンでもあった、オーストリアのルドルフ大公のために作曲され、献呈された。第一楽章が作曲された1809年は、ナポレオン軍の第二次ウィーン占領期であり、ウィーンの皇族は戦禍を逃れるために疎開を余儀なくされた。敬愛する大公との別れの際に作曲したのがこの曲である。

全三楽章で構成されるこのソナタは、それぞれに副題が付けられており、「告別」という題は第一楽章のものである。同様に第二楽章は「不在」、第三楽章は「再会」と副題が付く。第一楽章冒頭3音には「Le-be-wohl (さようならお元気で)」と書かれ、この3音の動機は、楽章の最後まで様々な形に変化しつつ登場する。第二楽章は大公のいない様子を表現。わずか42小節の中、不安定な様子で序奏的に次の楽章へ曲は流れる。第三楽章は終戦の1810年に大公と再会した喜びが描かれ、その心情が溢れんばかりに伝わってくる。コーダでは再会に安堵した様子が見え、最後にまた喜びが爆発したような非常に明るい気分で楽曲は終わる。(解説 植松美帆)

3. アヴェ・マリア F.P.Schubert (1797～1828)

600曲以上あるシューベルトのリートの中でも著名な作品であるアヴェ・マリアは1825年、シューベルトが28歳の時に作曲された。詩はスコットランドの詩人W・スコットの「エレンの歌 第3集」からA・シュトルクがドイツ語に翻訳したものである。

通常キリスト教の典礼音楽であり、聖母マリアを讃えるラテン語の曲だが、典礼と直接関係ないドイツ語のテキストで歌われる本作が、数あるアヴェ・マリアの中でも代表作となっているのは、この曲が持つ旋律が宗教性を感じさせ、美しいものであるからと言えるだろう。(解説 石川絵理)

4. 《薔薇》《祈り》 F.P.Tosti (1846～1916)

トスティは、アブルッツォ州オルトーナ出身の作曲家で、音楽教師である。彼の作品のほとんどは歌曲で、民謡風の旋律のものから洗練された芸術作品まで幅広い魅力がある。

《薔薇》は、その魅力が人から人へと伝わり、今日では多くの声楽家によって歌われている。ピアノが奏でる3連符にのせて歌唱旋律は8分音符で進んでいくのが特徴的で、非常に甘美な旋律とは裏腹に、歌詞は物悲しい内容となっている。

《祈り》は神秘的な音色が美しいトスティの佳作である。静かな祈りから始まって高まりを見せる旋律へたどり着き、また主への慈悲を乞うPP(ピアノシモ)で幕を閉じる。歌詞の内容としては、精神の苦しきから解放して欲しいと願う祈りの歌である。(解説 石川絵理)

5. 歌劇『キャンディード』より《着飾ってきらびやかに》L.Bernstein(1918～1990)

指揮者であり作曲家でもあるバーンスタインによって作曲された本作は、ミュージカルでありながらオペラとも呼べるような分類の難しい作品である。主人公の青年キャンディードは何者かによって連れ去られた恋人クネゴンデを取り戻すため旅に出る。彼は師の教えを受け継いだ楽天主義者であったが、冒険の最中様々な困難に遭っていく中で自身の思想が間違いであったと気付いていく。

《着飾ってきらびやかに》はキャンディードの恋人のクネゴンデによって歌われるアリア。美しい男爵令嬢だったクネゴンデだが、今やパリでユダヤ人と大司教に囲われる高級娼婦となっていた。自分の身の上を嘆き悲しむところからこのアリアは始まるが、それでも高級な装飾品に囲まれて高笑いして生きてやる！という女の底力と、そして悲哀を感じさせる楽曲である。
(解説 石川絵理)

6. ピアノ三重奏曲第25番 ト長調『ジプシー・ロンド』F.J.Haydn(1732～1809)

ハイドンは、モーツァルトと同時代、同じウィーンの作曲家です。神童として幼い頃から名声をほしいままにしてきたモーツァルトに対し、オーストリアの田舎でハンガリーやジプシーの民族音楽を聞いて育ち、独学で勉強し交響曲の父と呼ばれるまでになったのがハイドンでした。

このピアノ三重奏曲はその晩年に、チェンバロに代わって台頭してきたフォルテピアノのために作曲されました。第一楽章アンダンテは、バスの安定した響きに支えられ繰り広げられるピアノとヴァイオリンの温もりある対話のようです。第二楽章ポコ・アダージョの秋の日の黄昏を思わせる美しい調べには、身を委ねると安らぎと赦しが施されるようです。第三楽章プレストはハンガリー風のジプシー・ロンドで、3つの楽器が時に明朗軽快に、時に激しく奔放なジプシー風の楽想を交互に織り成しながらコーダへと駆け抜けます。
(解説 山田晴香)

7. 二つのヴァイオリンのための5つの小品 D.Shostakovich(1906～1975)

1920年代から1930年代前半にかけ、西欧の最新の音楽やジャズなどを取り入れ革新的、前衛的な作品を次々に発表していったショスタコーヴィチであるが、当時のスターリン政権下において社会主義リアリズムを欠くブルジョワ・形式主義的な音楽であると糾弾された。これにより彼はそれ以降スターリン政権が崩壊する1950年代初頭まで、政府が自国の音楽に求めた「民族的、社会主義的」の路線に沿う作品を発表し続けることを余儀なくされる。

本日演奏する『二つのヴァイオリンのための5つの小品』は、作曲家L・アトヴミヤーンがショスタコーヴィチのバレエ音楽、映画音楽から5曲抜粋し、管弦楽から二台のヴァイオリンとピアノのために編曲したものである。(本日は弦楽四重奏で演奏)何れも作曲年代は異なるが、スターリン政権の影響の薄いショスタコーヴィチ本来の情緒的で軽妙な作風を味わえる作品である。
(解説 清祐介)

8. バレエ組曲『くるみ割り人形』作品71a より P.Tchaikovsky(1840-1893)

『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』は3大バレエ作品といわれており、それらは全てロシアを代表するロマン派屈指のメロディメーカー、P.チャイコフスキーによって作曲されている。『くるみ割り人形』は、クリスマスプレゼントのくるみ割り人形から、少女が想像を広げて夢の世界に遊ぶファンタジーである。オーケストラが演奏する美しい調べに乗せて繰り広げられるバレエ、本格的な舞台装置や華やかな衣裳、上演時間の短さなど、子どもも大人も楽しめる大人気の演目である。

本作品は、バレエの初演に先駆けてチャイコフスキー自身が選んだ全8曲からなる組曲である。どの曲をとってもあまりにも有名であり、今日では多彩なアレンジでテレビやCMなどでも耳にする機会が多い。様々な編成用に楽譜が出版されているが、今回はヴァイオリン2挺、ヴィオラ、コントラバス、というとても珍しい編成のため、弦楽四重奏版からアレンジして演奏する。
(解説 西川奈穂)

Profile



植松美帆
(ピアノ)

富士市出身。県立清水南高等学校芸術科を経て、フェリス女学院大学音楽学部演奏学科、同大学院音楽研究科演奏専攻を卒業。在学中、学内オーディション合格者による「室内楽の夕べ」に出演。第16回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール大学生の部入選。入賞者によるコンサートに出演。これまでにピアノを在原圭伊子、滝口和子、桑原淑子、佐渡千春、加藤美緒子、田村安佐子の各氏に師事。県内外にてソロ、アンサンブル、伴奏の演奏活動を行う。現在、自宅の「植松美帆ピアノ教室」にてピアノ、ソルフェージュ、楽典の指導を行う他、すみやグッディ富士店でピアノ、コーラス講師として後進の指導にあたる。静岡県演奏家協会会員。



石川絵理
(ソプラノ)

富士市出身。県立清水南高等学校中等部を経て、県立清水南高等学校芸術科を卒業。国立音楽大学音楽学部演奏学科卒業。在学中、成績優秀者による「ヴォーカルコンサート」に出演。2014年12月、富士市振興公社主催のワンコインコンサートに出演。静岡県を中心に演奏活動を開始する。これまでに声楽を市村ひろみ、白鳥哲、秋葉京子の各氏に師事。現在、自宅の「石川音楽教室」にてピアノと声楽の指導を行う他、すみやグッディ富士店で声楽、コーラス講師として後進の指導にあたる。静岡県演奏家協会会員。



清 祐介
(コントラバス)

富士宮市出身。15歳よりコントラバスを始める。富士宮第四中学校、富士宮西高等学校を経て桐朋学園大学カレッジディプロマコースを修了。これまでにコントラバスを山西貴久、堤俊作、白土文雄の各氏に師事。室内楽を白土文雄、河村典子、小野崎純、ジリー・ロハンの各氏に師事。2006年桐朋学園オーケストラ演奏会に於いて首席コントラバス奏者を務める。在学中よりコントラバスアンサンブルに積極的に取り組み、自らオリジナル曲の作曲・編曲等を手がけ好評を博す。現在、静岡交響楽団団員として活躍する傍ら、富士山ユースオーケストラ講師、富士宮室内オーケストラメンバーとして地元の音楽文化の発展に貢献している。



西川奈穂
(ヴァイオリン)

富士宮市出身。静岡県立清水南高等学校芸術科を経て、常葉学園短期大学音楽科卒業、同専攻科修了。卒業時に福井巖賞受賞。卒業演奏会、修了演奏会、第16・17・18回定期演奏会出演。静岡県東部新人演奏会出演。これまで、浅岡幸男、樽井直美、竹内英美子、中塚和良の各氏に師事。現在、八十の会、Camarades Musicaux、トリオ湊MINATO、富士宮室内オーケストラにて活動を行う。オペラ・ディ・モーダプリンシパルメンバー。2010年、2012年、2015年にリサイタルを開催。かやはら音楽教室、富士ジュニアオーケストラ、富士山ユースオーケストラ、常葉大学教育学部附属橘小学校オーケストラ科の各講師。



山田晴香
(ヴァイオリン)

富士宮市出身。静岡大学教育学部音楽専攻卒業。これまでに、ヴァイオリンを荻生昌平・土屋一恵・外岡協子・河村典子の各氏に、室内楽を白土文雄氏に師事。モスクワ音楽院セミナー、ヘンデルアカデミー他、国内外の講習会に参加し、研鑽を積む。現在、常葉大学教育学部附属橘小学校オーケストラ科非常勤講師。富士宮室内オーケストラ団員として演奏活動にたずさわりながら、富士山ユースオーケストラ、静岡県オーケストラスクール等で講師活動を展開、後進の指導に力を注いでいる。



寺田さくら
(ヴィオラ)

富士宮市出身。2歳半よりヴァイオリンを始め、大学入学時にヴィオラに転向。東京音楽大学卒業。同大学大学院科目等履修修了。第29回静岡県学生音楽コンクール弦楽器部門中高生の部第3位。第15回日本演奏家コンクールにて特別賞。現在、静岡交響楽団に在籍。クラシックのみならず、アーティストのMV出演やCDレコーディングなど、ポップスの分野でも活躍している。